

『文心雕龍』の基本的性格 其三（完結）：『文心 雕龍』の諸子性について

甲斐, 勝二
福岡大学：助教授

<https://doi.org/10.15017/9707>

出版情報：中国文学論集. 19, pp.63-81, 1990-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『文心雕龍』の基本的性格 其三（完結）

— 『文心雕龍』の諸子性について —

甲 斐 勝 二

はじめに

筆者はこれまで同題の小論を二篇提出して来た。第一篇では『文心雕龍』の文学論としての基本的な性格を文体的創作論と論定し、第二篇ではそれが当時貴族優位社会の内において不遇であった寒門文士たちに向けての創作論であることを明らかにしようとした。本小論では更に歩を進め、『文心雕龍』に窺われる諸子的な性格とそれを巡る幾つかの問題について私見を述べて、以て同題の拙論の提出を終えようと思う。

—

『文心雕龍』は現在文学論として研究がなされているけれども、長い歴史の上では必ずしも文学論としてばかり見なされたわけではなかった。それを簡明に物語るのが、歴代各種目録の分類である。現在では、清朝に編まれた『四庫全書』の区分「集部・文学評論類」が最も妥当なものだと見なされているけれども、諸子に区分した目録も幾つかあったのである。筆者の確認しえた目録のうち、明の趙琦美『脈望館書目』が、『呂氏春秋』、『淮南子』、『新語』と共に子類雑家に入れ、清の金檀『文瑞樓書目』が、『呂氏春秋』、『老子』、『列子』、『莊子』、『說苑』

『文心雕龍』の基本的性格 其三（完結）（甲斐）

等と共に子類子書に入れていた。このほかに楊明照氏の調査された著録表によると、『文心雕龍』を子類に属せしめた目録として、『寶文堂書目』明晁璉、『徐氏家藏書目』明徐勣、『奕慶藏書樓書目』明祁理孫、『鳴野山房書目』清沈復榮等の数種類がある。

『文心雕龍』に論じられる個々の問題の性格を考えれば、今となつてはやはり文学評論に分類するのが適當であろう。しかし、先掲の目録同様に筆者も『文心雕龍』に諸子的性格を強く感じている。なぜなら、その書籍全体を劉勰自身がおこなつた文体区分にあてはめて分類するとき、その分類においては諸子に属すと考へて然る可きものに思われ、また、劉勰の当時の境遇を考慮すれば、『文心雕龍』に一著述としての諸子性を見ることも無理ではないように思われるからである。先に上げた各目録が如何なる理由で子類に分類したのか、筆者にはその詳細な理由がよく分からない。よつて、以下に筆者なりの理由を示し、その可能性を探つてみたい。

まず『文心雕龍』の執筆理由を明らかにする序志篇には、解題の後以下のように述べられていた。

夫れ宇宙は綿邈として、黎獻は紛雜たり、萃を抜け類を出るは、智術のみ。歲月は飄忽として、性靈は居らず、聲を騰げ實を飛ばすは、制作のみ。夫れ貌を天地に肖り、性を五才に稟け、耳目を日月に擬し、聲氣を風雷に方る有り、其れ萬物を超出したるは、亦た已に靈たり矣。形は草木の脆に同じくも、名は金石の堅きを踰ゆ。是を以て君子世に處すに、徳を樹て言を建つ、豈に辯を好まんや、已むを得ざる也。

これは、人間が文章制作に携わる必然性を解くものである。ここに劉勰が『文心雕龍』を制作した意図の一つを読み取ることができよう。この記述によると彼が『文心雕龍』を撰したその背景には文学論提出による立名の願ひがあつたと考へてよい。ところで、『文心雕龍』上篇の諸子篇では諸子の文体を規定して、以下のように述べている。

諸子は、道に入り志を見すの書なり。太上は徳を立て、其の次は言を立つ。百姓の羣居するや紛雜して顯る莫き

を苦しみ、君子の處世、名徳の章かならざるを疾む。唯だ英才の特達せしのみ、即ち炳曜として文を垂れ、其の姓氏を騰け、諸を日月に懸けり焉。

ここで説明される諸子の性格は、前掲の序志篇の引用文と内容をほぼ同じくするものであるばかりでなく、この引用文中、諸子の文体が劉勰の言うように「道に入りて志を見わすの書」であり、かつ「論」と「諸子」を區別して同篇に「博く萬事を明かにするを子と為す」と言うのだとすれば、正しく『文心雕龍』が、原道篇に「道」を論じる事から始まって文体論・構想論・修辭学・文学史・作家論等文章全体に互って論じようとした態度と重なるものではあるまいか。前掲の明趙琦美『脈望館書目』が、『呂氏春秋』、『淮南子』と共に子類雑家に入れ、清金檀『文瑞樓書目』が、同じく『呂氏春秋』と共に子類子書に入っていたのは、このような問題の全体性に着目しての事であつたと筆者は推測する。

第二に、劉勰は諸子の具体例を挙げながら、同篇にて次のように述べている。

七國の力政するに逮及し、俊又遽起す。孟軻は儒を膺けて以て磬折し、莊周は道を述べて以て翺翔す。……然るに繁辭積むと雖も、本體は易總ぶ、道を述べ治を言うも、五經に枝條たり。

ここでは各諸子がそれぞれ得意とする分野で政治に力を發揮した事を述べながらも、つまるところ『易』にその本体を総べられたものと見なされ、かつ「五經の枝條」として位置付けられるわけである。一方劉勰にとって文章制作の行為は如何なるものと見なされていたかという点、序志篇に言う。

唯だ文章の用は、實に經典の枝條、五禮之に資りて以て成り、六典之に因つて用を致す。君臣の炳煥する所以、軍國の昭明する所以、其の本源を詳かにすれば、經典に非ざる莫し。

つまり、諸子同様に經典の枝條であつて、政治に力を与えるものなのである。その上、『文心雕龍』の篇の数は「理を位し名を定るは、大易の數に彰にす」と述べられたように『易』によるものであり、また多くの研究者によつて指摘されているようにその文学論への『易』の影響は多大なものであつて、諸子同様『易』によつて総られたものと言つて差し支えないものであつた。

第三に、劉勰は諸子篇末に

嗟夫、身は時と舛い、志は道と共に申ぶ、心を萬古の上に標げ、而して懷を千載の下に送る、金石は靡ぶとも、聲は其れ銷んか乎。

と述べる。ここに諸子が執筆された状況を示す「身は時と舛う」の語は、以下の章に詳しく論述するように、正しく『文心雕龍』制作時における劉勰の境遇を語るものでもあつた。

このように見ることができるとすれば、『文心雕龍』の文体区分を以てそれ自身を区分するとき、それは諸子の文体に区分されて然る可き書籍と言つてよいように思われる。『梁書』本伝には、世間に認められない『文心雕龍』に対し劉勰自身は「自らその文を重ず」と記される。劉勰に一家の諸子の樹立を目指すほどの強い意気込みがあつたこと、十分窺い知ることができよう。

二

劉勰が『文心雕龍』制作にこのように強い意気込みを持つに至るには、彼の当時の境遇に大きな原因があつたように思われる。『梁書』本伝以下の記述に拠ると劉勰は『文心雕龍』執筆当時父の早世によつて家貧しく不遇の身であつた。

劉勰、字彥和、東莞莒の人。祖靈眞、宋司空秀之の弟也。父尚、越騎校尉。勰、早に孤なり。篤志好學にして、家貧しく婚娶せず、沙門僧祐に依る。

この本伝の記載と『文心雕龍』中の記述から、劉勰は当時の士庶區別において士族ではなく士族によって差別を受けた庶族に属すと論じたのが、王元化氏である。王元化氏の説は、詳細な議論であるけれども、当時の貴族交友社会に於ける評価の面からなされたもののように、視点を變えて政治制度的な面から見るとすれば、劉勰を士、あるいは士の資格を持った者と見なすことが可能に思われる。というのは、劉勰の家系が名族に属したか否かはさておき、その父尚は越騎校尉まで昇っているからである。恐らく劉宋のころであろう。この越騎校尉は宋代四品官であつて、史書の記述によれば、当時五品官以上の子孫は士資格を有する者と見なされた形跡がある。『齊書・禮志』曹思文上表に言う。

晋初大學生三千人あり、既に多くして猥雜なり、惠帝の時、その清濁を辨せんと欲す。故に元康三年、始めて國子學を立て、官品第五以上（の子弟は）國學に入るを得しめたり。大學と國學とはこれ則ち晋世に、その士庶を殊にし、その貴賤を異にせんとせしのみ。

これによると、五品官以上の子弟は南朝では士資格を持つとされていたらしく、四品官の越騎校尉の父をもつた劉勰は士資格を持ち得たはずである。ではなぜ王氏の説くように劉勰は庶族同様の扱いを受けることになつたのであろうか。それは恐らく劉勰が所謂寒士の立場にあつた為と思われる。宮崎市定氏の研究によれば、当時士族と庶族の中間に位置し、名門士族から「寒」と輕蔑はされても、確かに「士」資格を有したものととして、寒士の区分があつたらしい。宮崎氏は寒士の種類として以下の數種類を上げている。

一、先祖にしかるべき人があり、本人に才能があつて地方の衙門に仕えて相当高い地位に上つても、人が別にこ

れを怪しまない。(例陶侃)

二、王室あるいは名門の一族であっても、関係が疎遠な場合。(例司馬道賜)

三、一代で成り上がった者の子の場合。(例郭璞)

四、学問があつて士としての扱いを受ける場合。(例沈峻)

劉勰は当時貧窮していたとはいへ、その家系を考えると、過去に司空に昇つた秀之を一族に持つので第一、または第二の区分に属する寒士と言ふことが出来る。あるいは、指摘されたように秀之と無縁であつたとしても第三の例で考えることができよう。⁽⁶⁾よつて、劉勰が寒士であつたとすれば、彼の名族社会における扱いが、王氏に指摘されるように庶族同然であつたことも不思議ではないことになる。しかし、その扱いが庶族同様であつたとしても、劉勰自身にとつてみれば、自分も士であるという意識をそれだけに強く持つたはずである。その意識が最も強く表れるのが、程器篇であると筆者は見る。この程器篇は文章家の理想を記すものであるが、その記述には劉勰の強い士意識を読み取れるからである。劉勰は、程器篇の冒頭で『書経・周書』の一文を引き、士の資格として政治上の力量と文章力の兼有を述べるものとと解釈する。程器篇中「文士」の語を以て何度か文章家を呼ぶのは、文章家が本来士人の伝統上にあるべき為と見た為に違ひない。そのことは、「文士」の語を敷衍して同篇末に次のように述べられることから明らかである。

是を以て君子は器を藏し、時を待ちて動き、事業に發揮す、固り宜く素を蓄えて以て中を弼し、采を散して以て外を彪にし、其の質を榘柙にし、其の幹を豫章にすべし、之を摘けば必ず軍國を緯するに在り、重を負えば必ず棟梁に任ずるに在り、窮すれば則ち獨り善くして以て文を垂れ、達すれば則ち時を奉じて以て績を騁す、此くの若き文人にして、應に梓材の士なり矣。

このような主張は、劉勰の胸中に士人意識が強くあつてこそ成り立つものに違ひない。だとすれば、引用文中

「窮まれば即ち独善して以て文を垂る」の語は、正しく寒門文士劉勰の立場を代弁したものと見なすことができよう。

もしこのような見方が可能だとすれば、魏朝以来九品官人法の施行により、門閥貴族のみが高位高官に就き得た南朝にあって、過去一族に高級官僚を出しながらも当時既に没落し、さらに父の早世で貧窮に甘んじざるを得なかった寒門文士劉勰が、立德・立功という士人としての政治上の成功を諦め、『文心雕龍』の制作によって、第三の道、つまり文論制作という著述立言による立名の願いを持つに至るのは自然の成り行きと考えて良いのではないか。

三

諸子の性格を有すると見るとき、では、『文心雕龍』には如何なる特徴を見いだす事ができるのか。ここではその体系性を巡ってその問題を考えてみたい。周知のように『文心雕龍』は中国の文論史上極めて希な強い体系性を有している。その体系性のうち、最も重要なものは、何と言っても「道」から「五經」が導かれ、その「五經」から各種「文體」が派生したとする系統論であろう。なぜなら、これは『文心雕龍』の「綱領」と呼ばれる上篇の篇配列の骨幹をなすものであり、それは取りも直さず劉勰がこの論理に最も力を入れていたことを物語るものだからである。この派生図は、劉勰の言うところによれば、「根を尋ね、源を索めた」の方法の結果求め得たものらしい。⁽¹⁾つまり、劉勰が当時の状況から過去にさかのぼっていった結果示し得た文体の系図というわけである。しかし、記録時代内での索源ならともかく、各種文體が「五經」に発し、その「五經」が「道」に導かれると断言するとなると、その論理には基づくところがあつたのではないかと疑われる。そこで、この論理の由来について、李日剛氏はこう考えた。⁽²⁾まず『荀子・儒效篇』に曰く、

聖人なる者は、道の管なり。天下の道是に管す矣。百王の道是に一なり矣。故に詩書禮樂の是に歸す矣。詩は是れ其の志を言うなり、書は是れ其の行を言うなり、樂は是れ其の和を言うなり、春秋は是れ其の微を言うなり。

『文心雕龍』の基本的性格 其三（完結）（甲斐）

また揚雄『法言・寡見篇』に曰く、

或もの問う、五經に辯有るや。曰く、惟だ五經のみ辯爲り。天を説くものは易より辯なるは莫く、事を説くものは書より辯なるは莫く、體を説くものは禮より辯なるは莫く、志を説くものは詩より辯なるは莫く、理を説くものは春秋より辯なるは莫し。斯を捨てては、辯もまた小なり矣。

及び桓譚『新論・正經篇』に曰く、

古佚禮記、古論語、古孝經は乃ち嘉論の林藪、文義の淵海なり。(全後漢文卷十四参照)

などの文章に基づき、劉勰の文体派生原理が、『荀子』と漢代の思想家の觀法に導かれたものと見るのである。李氏と同様に『荀子』の影響を強く見る主張は張少康氏の論考にも見えるが、張氏は更に劉勰の思想に神秘唯心論の色彩をも見て取り、当時に流行した儒仏道融合の易繫辭伝解積の思想を加えている。

以上の主張は誠に尤もなものに思われるけれども、筆者には更にもう一つ別の書籍の影響を考えておく必要があると思われる。それは前漢末に撰せられた劉向の『七略』である。この『七略』の詩賦の分類に、『文心雕龍』に見られるような文体区分の萌芽が見られるという簡略な指摘は既にあるのだけれども、筆者にはもう少し強い関係を考えてよいのではないかと思われる。なぜなら、この『七略』は劉勰がその文体区分の参考にしたことが明らかだからである。あるいは『荀子』よりもより直接的な影響を与えたと考えられることもできるかもしれない。実はこの『七略』の影を『文心雕龍』の文体派生論理に強く感じることが、その諸子としての性格を筆者に考えさせる契機となったのである。なぜなら『七略』にも劉勰の所謂諸子的な性格が窺われるからである。よって、以下『七略』と劉勰の文体派生論との関係について検討を加えてみたい。

この劉向の『七略』は、いわば学術書の図書目録で、劉向の手で始められ、劉向の卒後、息子の劉歆によってまとめられている。そこで、本来は劉歆の『七略』と言うべきであろうが、劉歆は劉向の名で挙げているから、今はそれに従う。残念な事に『七略』の原書は既に滅びて現在その全貌を見ることはできない。しかし、『漢書・藝文志』はその班固の序文によると彼の『七略』を概ね踏襲したものらしい。よって、ここでは『藝文志』を『七略』と見立てて考察を進めることにする。

まず『七略』の全体構成を示そう。

- 一 六藝略 易 書 詩 禮 樂 春秋 論語 孝經 小學
- 二 諸子略 儒家 道家 陰陽家 法家 名家 墨家 縱橫家 雜家 農家 小説家
- 三 詩賦略 屈原賦 陸賈賦 孫卿賦 雜賦 歌詩
- 四 兵書略 權謀 形勢 陰陽 兵技巧
- 五 術數略 天文 曆譜 五行 著龜 雜占 數術
- 六 方技略 醫經 經方 房中 神僊

配列の順序に撰者の価値観を示すという伝統の思想は、この『七略』にも窺い得る。というのは第一の六藝略筆頭におかれる『易』は諸学芸の宗本と見なされたものだからである。劉向は六藝を総括して次のように言っている。

六藝の文、樂は以て神に和す、仁の表なり。詩は以て言を正す。義の用なり。禮は以て體を明かにす、明なるは著見す、故に訓無きなり。書は以て聽を廣くす、知の術なり。春秋は以て事を斷ず。信の符なり。五なる者は、蓋し五常の道、相須ちて備わる。而して易之を原と爲す。故に曰く、「易見る可からざれば、則ち乾坤或は幾んど息めり矣。」（師古曰く、此れ上繫の辭也）天地と終始を爲すを言うなり。

この主張は、六藝略中の經典の各論に於いて、その始源や性格の規定を『易』に結び付けて説く態度からも十分看取できる。つまり、劉向は『易』について、

易に曰く「宓戲氏象を天に仰觀し、法を地に俯觀す、鳥獸の文與地の宜を觀、近くは諸を身に取り、遠くは諸を物に取る、是に於いて始めて八卦を作りて以て神明の徳に通じ、以て萬物の情を類す。

と繫辭伝の文を引き、これこそ藝文の始源に立つものであることを印象づける。次いで『書』について「易に曰く、河、圖を出し、雒、書を出し、聖人之に則る、故に書の起る所遠し矣。」と述べるように、その他の經典は概ね『易』に結び付けられてその起源や性格付けが記されているのであった。

では、各諸子はいかなる位置付けをされているかという点、それぞれ以下のようにその始源を周代の官職に結び付けられて記されている。

儒家 …… 儒家なる者の流れは、蓋し司徒官に出ず。

道家 …… 道家なる者の流れは、蓋し史官に出ず。

陰陽家 …… 陰陽家なる者の流れは、蓋し羲和の官に出ず。

法家 …… 法家なる者の流れは、蓋し理官に出ず。

名家 …… 名家なる者の流れは、蓋し禮官に出ず。

墨家 …… 墨家なる者の流れは、蓋し清廟の守りに出ず。

縦横家 …… 縦横家なる者の流れは、蓋し行人の官に出ず。

雑家 …… 雑家なる者の流れは、蓋し議官に出ず。

農家 …… 農家なる者の流れは、蓋し農稷の官に出ず。

小説家 …… 小説家なる者の流れは、蓋し稗官に出ず。

そして最後に諸子の学術を締めくくり、

諸子十家、其の觀る可き者は、九家のみ。皆王道既に微え、諸侯力政し、時君世主、好惡方を殊にするに起る。是を以て九家の術、蠱出して並び作り、各おの一端を引き、其の善とする所を崇ぶ。……易に曰く「天下歸を同じくするも塗を殊にし、致を一にするも慮を百にす」（師古曰く、下繫の辭）今家を異にする者は各おの長ずる所を推し、知を窮めて、以て其の指を明らかにす。蔽短有りとも雖も、其の要歸を合すれば、亦た六經の支與流裔なり。（師古曰く、其の六經に於るや、水の下流、衣の末裔の如きなり）

と述べ、劉向は諸子の学術を經典の下流・末裔にあるものとして位置付けようとするのであった。恐らく劉向は經典こそ周王朝を支える根本思想となるものであって、その周代の思想の下に機能する各官職の仕事から派生してきた学術であると思なされる諸子は、所詮經典の系統下に属すべきものと考えたのである。

続く詩賦略に、賦や詩歌が『詩』によってその性格が規定され価値づけられるのは、經典重視の劉向の見方からすれば当然であろう。詩賦略に次ぐ兵書・術數・方技の三略は、共に以下のように記され、諸子と同様の位置付けがなされる。

兵書略…兵書なる者は、蓋し古司馬の職に出ず。

術數略…術數なる者は、皆明堂羲和卜の職なり。

方技略…方技なる者は、皆生生の具、王官の一守なり。

この三略も諸子同様の位置付けをされている所を見ると、經典との直接の関係は述べられていないものの、これらの学術もやはり諸子同様に經典の系統下に位置付けられるものと見なされていたに違いない。だとすると、この

『七略』は、各種學術を經典の下に配列して、經典を中心とする學術の一大体系を示そうとした一つの著述と考えることができる。なお、各略について劉向が述べるとき、そこには『易・繫辭傳』の引用が頻繁に現れること、引用文中括弧に示した顔師古の注から明らかである。これは劉向が各學術を經典の下に統合しようとしたとき、その論理の裏付けを特に『易・繫辭傳』に求めたことを物語るものであった。

これを要するに、『七略』の撰述方法として、次のような構成法を指摘できると思われる。劉向は、『易・繫辭傳』に論理の根拠をおき、その『易』を起点としてまず經典を學術の第一にあるものとしてとらえ、次にその經典から派生したものとして諸子を考え、詩賦を考え、技術系の実学三種を考えて『七略』の篇次を構成し、それによって經典を最重視した學術体系を示そうとしたのである。

ところで、この『七略』に見られる經典と各種學術との関係観は、『文心雕龍』上篇に見られた道と經典と各種文体との関係に極めて類似するものではあるまいか。劉勰は原道篇に、『易・繫辭傳』の語に基づき人の「文」の誕生を、

人文の元、太極より肇まる、神明を幽讚するは、易象惟れ先んず。庖犧は其の始めを畫し、仲尼は其の終りを翼す。而して乾坤の兩位にのみ、獨り文言を制す。言の文なるや天地の心なり哉。若し迺ち河の圖の八卦を孕み、洛の書の九疇を韞む、玉版金鏤の實、丹文緑牒の華、誰か其れ之を尸る、亦た神理のみ。

と述べ、最後に、

故に知る、道は聖に沿いて文を垂れ、聖は文に因りて道を明らかにし、旁く通じて滞ること無く、日に用いて匱きざるを。易に曰く、天下の動を鼓す者は辭に存すと。辭の能く天下を鼓する所以の者は、迺ち道の文なればなり。

と「道」から聖人を通して經典が導かれることを言っていた。また「宗經篇」に、

故に論說辭序は、則ち易其の首を統じ、詔策章表は、則ち書其の源を發し、賦頌詞讚は、則ち詩其の本に立ち、銘誄箴祝は、則ち禮其の端を総べ、紀傳盟檄は、則ち春秋根を爲す。並びに高きを窮めて以て表を樹て、遠きを極めて以て疆を啓く、百家騰躍するも、終には環内に入る所以の者なり。

と述べて經典と当時流行の各種文体との關係を指摘し、その派生關係を主張した。上篇文体論に扱われる文体の凡てがこの引用文に見られるわけではないが、劉勰が凡ての文体を經典の下に派生したものとして捉えようとした事は間違いない。このような、『易・繫辭傳』の論理に文の發生原理を求めつつ、現実には經典の下に各種文体を系統化する態度は、先に見た『七略』が『易・繫辭傳』の論理によりつつ諸學術を經典の派生形として見なそうとした態度と類似するものと思われる。『七略』には、『文心雕龍』に見える「道」と經典の關係が明示されていない点が些か異なるように見えるけれども、『七略』に、宓戲氏が「是に於いて始めて八卦を作り、以て神明の徳に通じ、以て萬物の情に類す。」との『繫辭傳』の引用を以て『易』の誕生が述べられていたのであれば、この「神明」の語に劉勰の「道」との構造的類似性を指摘するのはさほど難しいことではない。なぜなら、『七略』が引く「神明」の語の意味は劉勰のいう「道」と同じく「現象の背後に潜む真理」と考え得るものであるし、また、劉勰は原道篇中、『繫辭傳』によって「人文の元、太極より肇る、神明を幽讚するは、易象惟れ先んず。」と述べ、かつ「道」「神理」の語を「神明」とほぼ同じ意味で用いている。『七略』が、易象がそのように作られ發展して『易』になったと見なすのであれば、その『易』を大元に戴く各經典は本を正せば「神明」から生まれたものだということになるはずである。劉勰は經典を越えたところにある「道」をより強調し、劉向は經典をより強調したという違いがあり、しかも「道」と「神明」の具体的な内容には隔りを考えねばならないのだけでも、少なくとも『七略』の主張の中には「神明」↓「經典」↓「各種學術」と簡略化し得る各種學術の系統化の論理構造が内在していたと言つてよいと思われる。

このような比較に妥当性があるとすれば、劉勰が『文心雕龍』を撰するとき、分野は違うとはいへ、劉向『七略』が示した經典による学派生原理を、自分の文体派生原理に参考応用したと言うことも十分可能なものではあるまいか。ただしこの事は、その文体派生原理に当時流行の玄学思想の影響がないというのではない事、一応断っておく。

四

これまでの検討が、ほぼ当を得たものであったとすれば、以前拙論に指摘したように『文心雕龍』上篇は文体別の創作論であるとともに、当時盛んに作られた文体全体、つまり劉勰の所謂文章を「道」と經典の下に体系化しようとした狙いを持った部分でもあったと言つて良いと思われる。このような性格を有する『文心雕龍』が劉勰のよくな社会的に恵まれない境遇にあつた寒門文士によつて作られたことを考えるとき、そこには寒門文士を代表するものとしての強い願いが読み取れるのではあるまいか。劉勰はそれについて自分では明快には言わない。よつて、憶測の域を出ないことは充分承知のうえで、以下、これについて述べ、以て同題の拙論のまとめを兼ねようと思う。先の拙論において、筆者は次のように結論した。

『文心雕龍』は、そもそも当時貴族制度社会の下で不遇の立場に置かれた寒門の文章家たちに向けて作られた創作論なのであり、その見地に立つならば、『文心雕龍』の文体論の領域の広汎さの背景に簡明な説明が付けられる事、及びその文学論の根幹をなす「道」↓「五經」↓「各種文體」と展開する理論は、不遇の文章家たちが、自らの文章制作の立場を伝統的權威で意味付け価値付けようとしたものと見なし得る。

以上の結論は、『文心雕龍』が寒門文士側に立つた文学論として構成されたものであると云ひ換えることができる。ところで、本小論前述の検討によると『文心雕龍』綱領の位置を占める上篇には、劉向『七略』にみられたような、ある分野全体を分類と配列によつて体系化しそこに一つの領域地図を示そうとする姿勢があつた。しかも、

それは士人達が伝統的に權威として認めて来た「道」と經典による価値付けを持つものである。だとすると、そこに、次のような劉勰の願いを読み取ることが出来ないだろうか。それは、当時不遇の寒門文士の一人として、劉勰は彼らの携わった文章制作の場を、彼らの活躍を示し得て、かつ彼らの伝統的な価値観と矛盾しない一つの活動分野として理論的に体系化して確立したかったのではないかというものである。これを具体的に言うなら、当時上流士族つまり所謂貴族との交流の下で彼らが携わっていた修辭性の高い詩賦や、そのほかの文章制作の行為に、彼ら下積みの士人には機会の希な士人立德・立功の行為に代わるものとして、つまり、彼らの政治上の不遇に代わるものとして、高度の価値を与えて『文心雕龍』の中に構成し世に示そうとする願いがあつたと見ることも可能に思えるのである。

このように推測することが許されるのであれば、上篇の文体配列が、宗經篇の発言に予想される配列とは全く異なることに対して、説明がつけられるように思われる。というのは、前掲の宗經篇の引用文には、文体が、論說辭序（易）、詔策章奏（書）、賦頌歌讚（詩）、銘誄箴祝（禮）、紀傳盟檄（春秋）の順序で現れる。この順序は、『七略』に示された經典の順序に従つたものである。もし經典の權威のみを重んじるならば、この順序によって文体論が構成されてしかるべきであろう。しかるに文体論二十篇は、周知のように韻文系と散文系との二つに別かれ、韻文が初めに置かれている。¹⁵しかも、韻文では詩・樂府・賦という順序でその初めに文學性の高い詩賦の文体が置かれているのであつた。この配列が、たまたまそうなつたのではなく、劉勰が意圖的にこのようにしたことは明白である。なぜなら、文學原理論にあたる冒頭五篇には辯騷篇が置かれて楚辭の文章への利用が説かれていた。楚辭の利用は、何と言つても韻文、しかも詩賦の文体制作にとってより有効なものである。そのうえ、下篇の修辭論は高度の修辭を要求される詩賦の文体制作により有効なものとなつてゐる。よつて、劉勰は、数ある文体の中で何よりも詩賦の文体を最重視した文体配列を行つてゐると考えねばならないのである。

この上篇の文体配列は、劉勰の詩經重視からくることが当然予想されるのだが、南朝期には詩賦樂府等の韻文が特に榮生まれ、また文章家達によつて盛んに作られた状況をも踏まえて考える必要がある。例えば、文集の初めと言われる晋摯虞の『文章流別志』は韻文を集めていたと言われるし、¹⁶劉勰当時の文學總集梁蕭統の『文選』は賦・

詩・楽府が先ず始めにおかれ現在の六十卷本中の半分を越え、徐陵の『玉台新詠』は詩集である。また、『文心雕龍』に些か遅れる『詩品』では、貴賤を問わずに詩作りに熱中する様子が次のように描かれていた。

今の士俗、斯風熾なり矣。纔く能く衣に勝え、甫めて小學に就くや、必ず甘心して驚を馳す焉。是に于いて、庸音雜體、人各おの容を爲す。膏腴の子弟、文の速ばざるを恥じ、終朝點綴し、分夜呻吟して、獨り觀て警策と謂い爲すも、衆覩れば終に平鈍に淪つ。〔『詩品序』〕

ちなみに、寒門文士の中には、貴族との交遊で文才を認められて、官職を得た者がかなりいたようである。例えば、吳均は、寒賤の家柄ながら、劉勰同様沈約に文才を認められて、天監の初め柳惲に仕え日々に詩賦を作っているし、高爽は王儉に詩を贈り職を得ている。鍾嶸が指摘するような作詩の状況も、寒門文士にとってはかなり切実なものがあつたと言わねばならない。

このような状況を参考にすれば、劉勰が詩賦の文体を重視したことは、当時一般の文学の嗜好状況に従うものと言つて良い。だとすれば、經学の価値観に直接基づくのではなく、韻文、中でも詩賦を最重視して体系化したその背後には、前述のような劉勰の願い、つまり彼ら寒門文士が実際に接していた文学状況の現実に沿つた形での体系化とその士人思想下への組み込みへの願いを読み取ることも無理ではなさそうである。

おわりに

以上、「『文心雕龍』の基本的性格」という題で三篇の小論を提出した。誠に拙い内容ではあつたけれども、これまででの考察が当を得たものであつたとするならば、『文心雕龍』の基本的な性格、特に上篇のそれとして、次のような結論を導くことができるのではあるまいか。それは、『文心雕龍』は、当時劉勰同様の寒門文士たちが携わつていた文章制作を士人の正統な営みとして、道と經典の伝統的權威の下での価値付けを目指した、いわば諸子的性

格を持つものであって、そこでは、各文体の創作法について論じられながらその文体を基礎単位として道と經典の下に体系化が行なわれ、彼らの文才を発揮する場の確立が目指されているというものである。

ただし、劉勰の論理が、彼自身そうであった寒門文士の現状を反映したものだとはいえず、劉勰が無条件に現状を肯定する理論を提出してはいないことは強調しておかねばならない。劉勰は詩賦の重視と修辭性に富む美文文化という当時の文章制作の状況を基本的には肯定してはいるけれども、あくまで士意識の下に矯正し検討取捨された上での体系化を目指しているのである。文体論各篇で行われる文体の定義と作品批評そして創作法の指示より、それは十分明らかであろう。そこには、劉勰の具体的な文学規準、また内面化された審美観が認められ、筆者が文論研究を続けるとすれば、当然次にはこれらの問題を取り上げるべきである。これまでの筆者の拙論は、寒門文士劉勰と当時の貴族社会および『文心雕龍』との関係に重点を置いてなされたものであり、文学論の研究としてはこれだけでは片手落ちであること、十分承知だからである。しかし、それらの個別の問題については、既に多くの先人の述べるところであり、いま筆者の力の及ぶところではない。今後、拙論三篇の結論を再検討した後、可能なら再び取り掛かることにしたい。⁽¹⁸⁾

注

(1) (一)『文心雕龍』の基本的性格―その創作論としての編述体系(『中国文学論集』第十一号一九八二)

(二)『文心雕龍』の基本的性格其の二―寒門文士への創作論―(『中国文学論集』第十八号一九八九)

(2)楊明照『文心雕龍校注拾遺』(上海古籍出版社一九八二) 付録 著録参照。

(3)王元化『文心雕龍創作論』(上海古籍出版社一九八四)「劉勰身世与士庶区别問題」参照。

(4)宮崎市定『九品官人法の研究』(東洋史研究会一九五一・三)第二篇第三章七・八節参照。本文以下の上表文の訓読は該書より引用。

(5) 宮崎氏前掲論文同箇所より整理引用。

(6) 程天祐「劉勰家世の一点質疑」(『社会科学戦線』一九八三—三)では、劉勰と劉秀との縁はないという指摘がなされている。

(7) 『文心雕龍・序志篇』に「詳観近代之論文者多矣、…並未能振葉以尋根、觀瀾而索源、不述先哲之誥、無益後生之慮。」とあり、先行する文論に源に遡る方法の欠落を指摘する以上、劉勰が源に遡る方法を用いたことは疑えない。

(8) 李日剛『文心雕龍斟詮』(民国七一年五月国立編訳館中華叢書編審委員会) 宗経第三題述参照。

(9) 張少康『文心雕龍新探』(齊魯書社一九八七・四) 二『文心雕龍』的文学理論体系及其思想渊源(一)原道論参照。

(10) 興膳宏『中国の文学理論』(筑摩書房一九八八・九)「六朝期における文学観の展開」では、『漢書・芸文志』つまり『七略』に文章流別の萌芽をみようとする。なお同論文集掲載「『詩品』について」では、『詩品』にみられる源流考察の方法が『七略』にヒントを得たものであるかとの指摘がある。また、王運熙『文心雕龍探索』(上海古籍一九八六・四)「文心雕龍産生の歴史条件」では、文体の索源方法の淵源として『七略』に遡れる事を示している。

(11) 樂府篇に「昔子政品文、詩與歌別、故略具樂篇、以標區界。」

諧謔篇に「然文辭之有諧謔、譬九流之有小説。」

諸子篇に「逮漢成留思、子政讎校、於是七略芬菲、九流鱗萃、殺青所編、百有八十餘家矣。」

章表篇に「七略藝文、謠詠必録、章表奏議、經國之樞機、然闕而不纂者、乃各有故事、而布在職司也。」

(12) 金谷治「『漢書』芸文志の意味―体系的な哲学的著述として―」(文化二〇一六、一九五一・十一)参照。金谷論文では、古文テキストを強調し、新たな儒教の統一化の場を得ようとした劉歆の思想を「芸文志」に読み取ろうとする。

(13) 注(1)拙論(一)及び、王運熙『文心雕龍探索』「『文心雕龍』的宗旨、結構和基本思想」参照。

(14) 注(1)拙論(二)参照。

(15) 『文心雕龍』下篇については問題があるが、上篇の篇次については、管見の及ぶところ注(8)に引く李氏のみが、雜文篇と諧謔篇の入れ換えを説くばかりで、一般には劉勰当時の篇次は今に伝えられていると考えられている。もし、拙論に説くように劉勰が『七略』によっているとすれば、雜文と諧謔は現在の位置のままが良い。何故ならば、劉勰は諧謔を小説家にとたえて

いる。『七略』では諸子略の最後におかれるのが小説家である以上、小説に譬えられる諸書は韻文類の最後に置かれて然る可きであるからである。

(16) 輿膳宏「摯虞『文章流別志』攷」(『入矢・小川教授退休記念中国文学語学論集』一九七四) 参照。注(10) 論文集再掲載。

(17) 『梁書・文学伝』 参照。

(18) 本小論では、『文心雕龍』が、『七略』の學術系統化の理論を参考応用したものと考えたが、『七略』の著者劉向劉歆と同様の古文経学思想の持ち主として劉勰の文体派生論を位置付ける事ができるかもしれない。また、「道」について、拙論の通り寒門文士がそれを要請したものとすれば、やがて寒門文士を政治の場に吸い上げる科挙の登場と密接な関係があると思われる唐代の古文運動に見える「道」が持つ意味との関係も考えなければならぬ。劉勰の「道」と古文運動の「道」では内容は大きく異なるように見えるけれども、非貴族文士側の主張に果たす役割については、何か共通するものが考えられるのではないか。これらの問題については、小論の延長の上に他日再び考えてみたい。